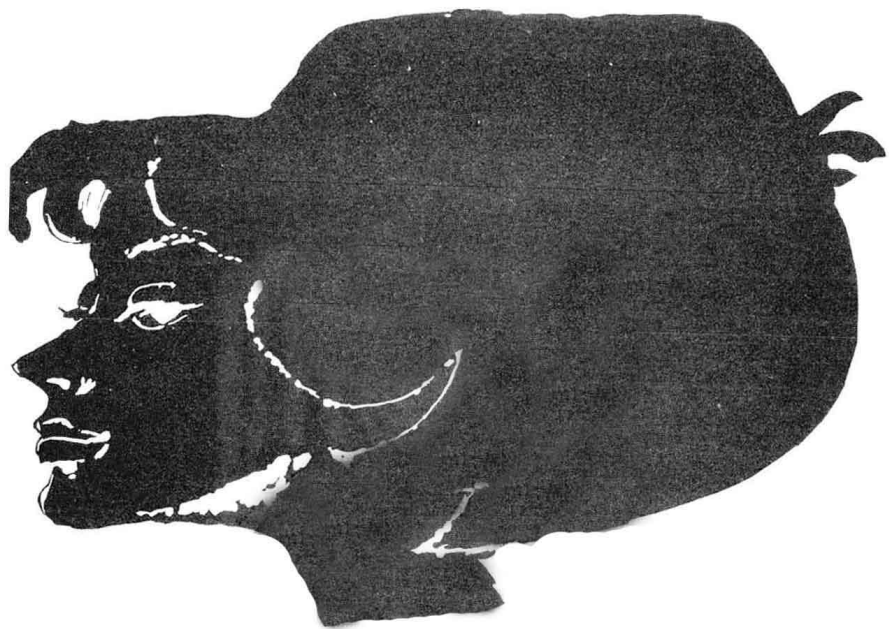


似ている女

近藤啓太郎

似ている女

近藤啓太郎



似ている女

1962年6月10日 第1版刊行

Y 330

著者 近藤啓太郎

刊行者 矢 牧 一 宏

印刷者 上村正夫

発行所 東京都新宿区 株式
東 京 場 町 20 会 社

七 曜 社

電話九段(331)2418 振替東京19613

落丁・乱丁のものはお求めの書店又は本社でお取替え致します

© Printed in Japan

上村印刷・中西製本

目

次

■女へん九九話

文壇の伝統を守る話

むかし殿様いま教師

G・I たちのあけっ放しの痴戯

インドゾウって色気があるわ!?

―山本富士子と有馬稲子―

当世江戸小唄

ドタン場で手玉にとられた色男

―美校生のころ―

ミュージックホール

風流ケモノ紳士録

96

88

60

59

45

30

25

7

巧妙な象の復しゅう

105

―アベック泥んことなる―

細身の剣一突き of 早わざ

110

―快感に涎ながす牝牛―

夜の蝶の階段

118



似ている女

好奇心な冒険

133

奇妙な女

159

似ている女

191

装幀 宮永 岳彦

女へん九九話

わが国の小説家には、飲む、打つ、買うと三拍子そろった人物が多いと聞いているが、私たちの年代の小説家にはそうした人物がめったに見あたらない。

たとえば私がふだん親しくしている小説家の中で、安岡章太郎も庄野潤三も小島信夫も三浦朱門も、飲む、打つ、買う、どれ一つにも縁のない方である。きわめて真面目な、家庭的な人たばかりのようだ。

阿川弘之は、打つ方は好きだ。ここ三年ほど、私と阿川とY Oは会えばかならずコイコイをやって愉しんでいる。私が暫くのあいだ上京しないと、阿川はがまん出来なくなり、南房州鴨川のがが家まで押しかけて来たこともあった。アメリカ留学中も、ラスベガスへ通い、だいぶ儲けたということである。が、阿川も、飲む、買うの方は全然ダメなのだ。

ENとなると、彼が話すことを真に受けて聞いているかぎりでは、これは遊びごとの大家ではないかと思いかねないが、実は何一つとして実行の出来ない、これまた真面目な男なのである。特にENはカソリックの信者だから、飲む、打つ、買う、すべてが罪なのであろう。それだけに

かえって、そうしたことに對する欲望が強烈であり、想像はたくましくなり、それを話すときには経験者より以上に真実味がこもるといふ場合も多いのだ。ENはせいぜいニセ電話をかけて、友人をかついで喜んでいるぐらいが、実行の限度なのである。

ENの電話といえは、ある時のこと上京中の私に、昨夜バーで別れたENから電話がかかってきた。

「お前、あれからどうしたんや？」とENが訊く。

「おとなしく、宿へ帰って、寝たよ」

「なんや、情けない奴やな、わしはあれから、えらいこと、もててしもうてな。バーの女の子を二人連れて、ホテルへ行つて、サンドイッチをやったんやぜ」

とENは得意になって大声でわめき立てている。

「それはよかったが、そんな大きな声を出して、大丈夫か。細君に聞こえるぞ」

「なんや、お前はいよいよ情けない奴やな。女房が、そんなにこわいのか。お前やYOはふだんえらそうなこういうとるが、いっこうにあかん奴やな。女房みたいなもの、どこがこわいのか、わしにはさっぱりわからへん」

とENはいよいよ図にのつて、まくし立てた。

「そりゃ、お前は女房がこわくないだろうよ」と私もいい返してやった。

「おれやYOはほんとに実行するから、女房がこわいけど、お前のは口先だけで何一つ実行してないんだから、こわくないはずさ」

するとENは、私のいったことが図星だったことを証拠だてるように、何もいい返すことが出来ず、不意に長らく沈黙してしまった。

そんなわけで、私の親しい小説家の仲間で、三拍子どうやらそろっているのは、私とYOの二人だけのようである。

「どうもおれたちの仲間は、真面目な連中ばかりで面白くないな」と、数年前のことYOが私にいったことがある。

「全く、何だか情けないみたいだな」

「どうです君」とYOが不意に思いついて代議士みたいな演説口調でいった。

「君と僕とで亡びゆくわが国文壇の、飲む、打つ、買うの伝統を守ろうではありませんか」

「賛成！」

「ところで、さっそくだが」とYOは隣室の細君の方を気にして、急に声をひそめていった。

「面白いところがあるんだが、これから一緒に行ってみないか」

「面白いところっていったって、どんな風に面白いところだ？」と私も声をひそめて訊き返した。

「TAさんから聞いたんだけど、コール・ガールの来る家があるんだってさ」

「コール・ガールっていったってインチキなんじゃないのか？」

「いや、TAさんがよく行ってるんだから、大丈夫だ。TAさんはその夜来た女がAデパートに勤めているという、次の日、確かめに行ってみるんだが、嘘じゃなくちゃんとしたそうさ。大丈夫だよ」

TAさんという人は、私たちより年上の小説家で、嘘をいつてかついだり、大げさな話をする人ではなかった。私とYOはわが国文壇の伝統を守るため、善は急げとばかりに、さっそくその夜、出かけたのだった。

TAさんからYOが教わっていた通り、私たちは渋谷から出ている私鉄のある駅で降りると、線路沿いに崖の上の方に登って行った。その家は、見るからにいかかわしい感じの、古ぼけた旅館で、うす暗い路地に面して建っていた。玄關の前で、私とYOはお互に気おくれを感じて立ち止まった。いきなり初めての家へ入って行って、断わられるのではないかと思うと、お互に自分が先に入って交渉するのがいやだった。

「お前が先に入れよ。お前が誘ったんじゃないか」と私はいった。

「お前が先に入れよ。こういう面白いところへ、おれが連れて来てやったんだもの」とYOはい返した。

「面白いところかどうか、まだ分ったもんじゃない」

私はそういう返しながらも、背後を通り過ぎる通行人がうさんくさそうな表情で私たちをながめて行くのを感じると、思い切つて玄関の戸を開けて中に入った。YOも続いて入ると、私の背後によりそうようにただずんだ。

「いらっしゃいまし」

玄関に出てきて両手をついたのは、百姓婆さんみたいな女だった。顔中に太い皺の刻まれた、顎骨の張つた茶色い顔をした婆さんで、うす汚いモンペをはいていた。

「小説家のTAさんに聞いて来たんだけど、あそぼしてもらえるかい？」と私はいった。

「ちょっとお待ち下さいまし」

婆さんは急にニヤリと笑つて、私たちの顔を見た。それから立ち上ると、せむしみたいな前かがみで、ガニ股に歩きながら、奥の方へひっこんで行った。婆さんの笑い顔や歩き方は、大それた卑しい感じで、何となく気味が悪かった。

「すげえ婆さんだな」と私は背後のYOをふり向いてささやいた。

「感じがあるよ」とYOはひとり合点の調子でうなずきながらささやき返した。

「コール・ガールの来る家の婆さんらしいよ。かえって、あんな感じのが……」

そういつているところへ、婆さんが再び現われた。

「どうぞ、お上りくださいまし」

私たちはほっとして、靴を脱いだ。急勾配の階段を上り、二階の八畳に案内された。

「TAさんの話では、女将というのは生花の師匠だそうだが、まさかあの婆さんじゃないだろうな」とYOがいった。

「まさか。でも、ほんとにこんな家にデパート・ガールや踊り子が来るのかな」と私は安普請の室内を見まわした。

階段を上って来る足音が聞こえてくると、私たちは沈黙した。

「ごめん下さいませ」

もの静かな声がして、音もなく襖が開くと、そこへ両手をそろえて女が挨拶した。細面の、吊り気味の切れ長な眼を持った、品のいい中年女で、これが女将であった。

女将が私たちの傍に来て座ると、YOがこういった。

「TAさんから聞いて来たんですけど、なにぶんとよろしく」

「こちらこそ、どうぞよろしく」

「さっそくですが、いい子がいますか」

「さあ、それがねえ……。みなさんのお気に入るような人がおりますかしら。お二人ともおむずかしいんでございましょう」

「いや、それほどむずかしいつもりですがね」

「TAさんも、なかなかむずかしい方ですね。芸術の先生方は、みなさん、なかなかおむずかしいわ」

「いやいや、とんでもない」

私とYOは芸術の先生といわれて、大いに照れてしまい、なんとなくあわてた。

「特にきょうは夜分でございましょう。思うような人を呼ぶことがむずかしいんでござい
ますよ」

「それはまた、どういうわけで？」と私が訊いた。

「昼のうちならお勤め先へお電話することが出来るんですが、夜はみなさん、お家へお帰りにな

っていらっしやるでございましょう。お電話のあるお家ならよろしいんですけど、お電話のないお家の方はちょっと連絡がつきませんし、それにお電話があっても、お家へ連絡されては困るという方もいらっしやいますし」

「なるほど。すると、きょうはろくなのがないっていうことになるかな」と私は性急にいった。

「とにかく何人かお呼びしてみましよう。そして、もし気に入られませんでしたなら、車代をやってお帰しになっていただければ、およろしいですから」

「じゃ、そうしてもらいましょう」

「かしこまりました」

女将がひきとったあと、私とYOはビールを飲みながら話し合った。

「これはあまり期待は出来ないな」

「ま、最初だから仕方がないさ」とYOがいった。

「それよりも、あの女将は一体、何者だろうね。ちょっときれいな女だし、それに品がいいじゃないか」

「ほんとだな。どういう経歴の女かな」